

# ワクワク留学体験記

## インド滞在記

### ～研究開発とコミュニケーション～

嵯峨 智 (筑波大学)



#### 1. はじめに

はじめにお断りしなければならないのは、本報告はVRに関連する留学報告でもなければ、研究のための滞在報告でもありません。機会を得てインドで三週間ほど研修生活をした報告であり、留学を目的とした学生にはあまり参考にならないかもしれません。

#### 2. やっぱりインド

「やっぱりインド行くことになったみたいだよ」生まれたばかりの子供をおいて長い間家を留守にすることになり、奥さんに申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら手続きを開始したのは出発一ヶ月前です。インドはビザも必要だし、予防接種もあるのでなかなかハードなスケジュールです。日比谷にある海外出張ご用達のクリニックで予防接種を渡航日までにぎりぎりクリアし、ビザは代理店に任せてなんとかインドへ出発することができました。

そして、デリーでの乗り継ぎ待ちで休憩に入ったスペースで早速軽いインドの洗礼を受けます。トイレに入ると、そこに紙はありません。シャワーみたいなものがあるだけです。ウォシュレットじゃないですよ。有名な「左手をつかって水で清める」というあれです。びびりました。手持ちのティッシュがあつてよかったです。インドでは紙は必携ですね。その後、無事乗り継ぎ、目的地のプネ空港を出ると、なんだか人があふれかえっています。そりゃそうです。ここは人口第二位のインドですからね。なんともいえず人いきれの雑然とした雰囲気が漂います。砂埃が舞う中、クラクションを鳴らし続けながら走るリキシャに遅しさを感じました。

#### 3. なぜにインド?

私は現在、筑波大学において、enPiT ビジネスアプリケーション分野の教育プログラムを推進しています。このプログラムは主に修士学生が参加可能な先端的なソフトウェア開発、プロジェクト開発のための教育プログラムであり、希望すれば日本のどの大学の学生でも受講可能です。

昨年度は、本プログラムの一貫として、優れた学生とともに教員数名がグローバルデリバリーの本場であるインドにおいて、実際にAgile開発を実践しているインド人開発者とともに開発工程を実地に体験する研修を受けようということになり、その教員の一人に私が選ばれた次第です。

本報告は、21日間のインドでの研修生活の様子です。ソフトウェア開発の研修ですから、Agileや、Scrumの意味、各種ツールの準備として、Java、Androidはもちろん、JUnitおよびRobolectricといった魔法の呪文みたいなものについても簡単な講習を受けてからインド入りし、Scrumというグループによる実践開発を開始しました。グループは教員2名、学生2名、大手情報系社員2名、現地インド人開発者3名で構成され、その多様性から、大変興味深い体験となったことは後述します。

今回の研修中、現地寺院のツアーや、ヨガ体験教室、現地担当者宅でのお茶会など、インド文化に触れる機会を多く得ました。そのひとつに、平日の仕事の合間にはチャイを飲む休憩を必ずとることがあげられます。そのため、手軽にチャイが飲めることが必須ですから、職場にはチャイを簡単につくれるコーヒーマーカーが常備されています。お湯とミルクが半々で出てきて、スパイス入りのティーパックを入れて作ります。もちろん砂糖も必須です。

気になる現地の食ですが、毎朝の食事は宿舎、昼は会社の食堂でとりますが、日本人研修生向けに、胃腸への負担を低くするため、辛さをおさえたインド料理を出していただきました。ただ、私個人はもともとインドカレー大好きですから、朝昼の食事よりも、近隣のレストランでの夕食が楽しみでした。どこいっても安くてもマア〜イですよ、素敵すぎます。もちろんメンバの中には長期滞在のため、カレーが胃腸につらくなってしまう人もいますので、そんなときにはおいしいイタリアンや中華、韓国料理のお店も探せばあります。でもそんなおいしいイタリアンでも中華でも韓国料理店でも、メニューにはカレーの欄も必ずあります。

#### 4. 研究開発にもコミュニケーションを

さて、今回インド研修にて Scrum を組んだグループについて紹介したいと思います。さきほども挙げましたが、構成員は大学教員に修士学生、大手情報系会社員にインド人開発者から成り、年齢層も幅広ければ、背景も全く異なる人々です。当初こんなに違う人達とうまく開発できるのかと心配になりました。なにせ上はアラフィフ、下は修士学生、片や大学教員、片や情報系社会人、その上プログラミングに一家言ある現地開発者、さらにはプログラミングなんて新人研修以来だという女の子までいるのですから。

やはりというべきか、当初、インド人開発者と我々との間でかなりの擦れ違いがありました。というのも、プロジェクトの進め方が当初研修担当の日本人から聞いていたものと大きく異なっていたうえ、多少の言語障壁もあり、我々も彼らとコミュニケーションをとることをややためらいがちだったためです。「彼らがそう言うならそのとおりにやっておこうか」という雰囲気でもちょっと殺伐としていたと思います。

一方我々日本人の間はどうかというと、これが最初こそどうなることかと思いましたが、共同生活はじめてみると実に素晴らしいグループになっていきました(と私は思っています)。通常、研修では宿泊施設に帰れば部屋に一人となり、自分の時間になりますから、同じ時期にいた他の研修グループでは食事や観光は一人で行ったりするところも少なくありませんでした。しかし、我々のグループでは緑色の SNS コミュニケーションツールを導入したおかげで、食事はもちろんのこと、観光情報や、カードゲームのお誘いまでみんなで共有し、単独行動に陥ることなく、グループで多くの情報と行動を共有する機会をもてたので、世代や背景の違いによる

ギャップはあまり感じなくて済みました。さらにメンバにコミュニケーション力が高い学生がいたこともあり、彼を中心により大変親密なコミュニケーションができたように思います。

そんなこともあり、その SNS グループにこそ入ってもらいませんでしたが、インド人開発者とのコミュニケーションの重要性もおのずとわかってきました。そのため、開発の途上で不明なことがでてきたら、ためらいなくその場でフロアミーティングを開催するなど、密に情報交換するようになり、チャイタイムも一緒に過ごすことで、開発も徐々にまわりはじめ、言語障壁なんていつの間にか感じなくなっていて、いつの間にか和気あいあいとした雰囲気の良いグループになったように思います。

実は、このようにコミュニケーションを醸成することも Scrum 開発の肝なのですよね。グループとして自分達で決めるべきことは自分達で判断して進め、自己組織化をしてゆきます。そのために必要なことのひとつには情報の透明化があります。透明にするためには密なコミュニケーションは必須なわけです。SNS ツール万歳といっているわけではないのですが、研究開発をグループとして進める場合、密なコミュニケーションを容易に実現する可能性をもっているツールとして、SNS ってよいかもしれないと、この体験を通じて感じました。もちろんツールだけではなく、コミュニケーションを密に取る努力も重要なことは、コミュニケーション力の高い学生の存在や、インド人開発者との件からも明らかかなことは言うまでもありません。

#### 5. おわりに

いつの間にかインドの話というより、グループでの研究開発におけるコミュニケーションの話にすりかわってしまいましたが、以上の内容は通常の研究室運営においても活かせるのではと思います、乱筆ながら筆をとらせていただきました。先にも記しましたが、私は現在プロジェクト開発のための教育プログラムを推進しており、このプログラムの中でも Scrum を実践しています。興味をもっていただきましたら是非「つくば enPiT」で検索してください、と我田引水できたところで終わります。

#### 【著者略歴】

嵯峨 智 (サガ サトシ)

筑波大学システム情報系准教授。力覚、触覚センサやディスプレイを中心としたヒューマンインタフェース、VR 技術に関する研究に従事。博士 (情報理工学)